

日本人の危機管理意識の脆弱さに関する一考察

山本 勇次*

Japanese Weakness in Crisis Managing Consciousness

Yuji Yamamoto*

要旨

日本人の危機管理意識の脆弱さは、元内閣安全保障室長の佐々淳行氏によって、日本列島の地理的条件、外的緊張と、その反動としての弛緩とを繰り返す歴史的條件、それに「熱しやすく冷めやすい、忘れっぽい淡泊な」国民性に理由付けられている。それに対して、井沢元彦氏は、「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」との視点から説いている。またこの問題は、日本人の「転向」研究から丸山正雄や橋川文三は、神道の裸身に外来思想を「着せ替え人形」のごとく着たり脱いだりする日本人の「理論信仰」と「実感信仰」との乖離的共存性からも説明されるであろう。筆者は、マーチとサイモンが言う「認知的合理性の限界」という視点から、この問題を論考してみたい。即ち、日本人は科学的実証で説明不能な現象には感覚的実証ですましてしまうところがある。この日本人の感覚的実証性の底には、神道的な「神頼み」のひとりよがりが見え隠れしている。だから日本人は、悪い予測を論じあって周囲の不安を煽るよりも楽観的・希望的観測に賭けて嵐の通り過ぎるのを待とうとする習性が古代から続いている。昨今の「竹島」や「尖閣列島」をめぐる領土問題にしても、日本人の対応は、危機管理意識の脆弱さ、あてのない楽観主義が見え隠れしている。

Abstract

Japanese weakness in crisis management consciousness has already explained by Atsuyuki Sasa, former Chief of the Cabinet Security Council, as part of the Japanese national character. Motohiko Izawa also clarified this weakness in terms of the law of reaction of the spirit of language (*kotodama*) to a negative prediction. This problem was also attributed by Masao Maruyama and Bunzo Hashikawa to a crippling of theoretical faith and real faith. In this paper I would like to explain Japanese weakness in crisis management consciousness by means of March and Simon's "limits of cognitive rationality." The Japanese tend to depend upon a sensual positivism whenever a scientific positivism is incapable of elucidating a phenomenon. At the bottom of this sensual positivism there seems

*やまもと ゆうじ：大阪国際大学名誉教授〈2012.9.28受理〉

an individualistic trust in spiritual beings as shown in Shinto belief. This is why the Japanese are inclined to wait for typhoons to go away instead of ringing alarm bells by stating annoying opinions on the issue to the public.

(1) 本稿の問題意識：

平成13年11月7日に大阪国際大学において人間系共同研究プロジェクト（「OIUの将来構想における国際性と地域性の統合」）の研究発表会が開催されたが、筆者はそこで「大阪国際大学での“フィールドワーク論”・“危機管理論”の開講試案」と題する個人発表を行った。本稿は、その発表内容に基づいた研究論文である。しかしながら、口頭発表と論述発表には発表形式の相異に基づく若干の内容のズレが生起するのが常である。本稿もその例に漏れない。ここでの内容は、口頭発表での内容を継承しながら、更にそれ以後に書き加えたものを収集して、本稿の形でまとめることとしたい。この時期にまだ幾分不満足ながら本論文を取って発表するのは、昨今騒がれている竹島や尖閣列島の領土問題への対応に関しても、筆者には日本人のおおらかな楽観主義、つまり危機管理の甘さが共通して露呈しているのではないかと痛切に感じるからである。

筆者は現在の自分が危機管理の専門家であると吹聴する気持ちは毛頭もない。しかしながら筆者の知る限り、現在の日本において学問的に危機管理の真の専門家であるという人々が多々いるとも思えない。前大戦の敗戦以降の民主化と経済発展の時代の流れの中で、「平和教育」を尊重してきた我が国の大学（恐らく防衛大学を除いて）において、戦争に関する諸科学（戦史、戦略、戦術、兵器論など）に関する講義は一般の大学においては封印されてしまっている。日教組の機関紙たる『教育評論』の1993年8月号に山辺芳秀氏による「教研集会から見る日教組の平和教育」と題する論文の中で「平和教育実践」に関する三つの目標が掲げられている。その三つの目標とは、(一)「戦争の持つ非人間性、残虐性を知らせ、戦争への怒りと憎しみの感情を育てるとともに、平和の尊さと生命の尊厳を理解させる」、(二)「戦争の原因を追求し、戦争を引き起こす力とその本質を、科学的に認識させる」、(三)「戦争を防止し、平和を守り築く力と、その展開を明らかにする」であった（井沢元彦1994：207）。井沢（1993：207）によれば、「このうち（二）と（三）について、筆者は教育を受けた覚えがまったくありません。これは、友人などとは話し合った結果でも同じですが、いわゆる日教組、あるいは革新系の教育というのは、（一）に集中しているのです。」

筆者は、この井沢氏の見解に組する者である。日本人の心理の中では、戦後の平和と繁栄の享受は、戦前の軍国主義への猛反省と嫌悪を表裏一体化しながら、おぞましい悪夢の正体からは目を反らして徒に変則的な「平和教育」・「民主教育」に邁進してきたのではなかったか。何も日教組だけではない。大学においても事情はまったく変わらない。上述の「平和教育実践」の第二と第三の目標は、戦後の日本の大学においても何ら論じられることはなく、「ケガレ」の対象として遺棄されてきたのではあるまいか。（この点で筆者の知る唯一の例外は、上智大学の国際関係論教授で『戦争論』を世に問うた井口邦子くらいではな

かろうか。)

筆者はネパールと日本をフィールドワークの対象とする文化人類学徒であり、危機管理の専門家ではない。しかし行動科学的視野から「危機管理論」を体系化し、それを将来の日本人の若者に講義することが極めて必要だと考える者でもある。そんな筆者が上記の共同研究会での発表で「大阪国際大学での“フィールドワーク論”と“危機管理論”の開講試案」というやや未成熟な研究テーマを選んだことには、以下に述べる三つの直接的な自己体験があったからである。その第一は、平成13年度の前期に立命館大学の文学部・産業社会学部において「フィールドリサーチ論」という新規開講の講義を担当したことがあった。幸いにも筆者のこの講義は、受講学生の評価ではかなり好意的な反応があって、機会があれば他の大学でも開講したいと考えるようになった。言うまでもなく、文化人類学徒による異文化環境でのフィールドワークとは、慣れぬ現地語を使用した孤独な情報収集作業の連続であり、その遂行には必ず調査者・旅行者としての自己の「危機管理」的な側面を必須とする。したがって、筆者は、フィールドリサーチ論を教えながら自分が今まで従事した外国でのフィールドワークを「危機管理」という視点から再考してみる機会が得られたのであった。

第二には、平成10年度・11年度科学研究費補助金（研究課題番号・国10041041）により筆者はネパールのポカラにおいて「スクンバシ」と呼ばれる都市に流入する土地難民（スラム地区住民）の実態調査に従事したことがあった。（この現地調査は現在も継続中。）そして、スクンバシの増殖現象がネパール国内の政治情勢の悪化、国内の反政府運動の激化に応じて増殖が盛んになるという事実を解明した（山本2000）。しかもスクンバシは、「マオイスト」と呼ばれるネパール人共産主義ゲリラ組織と水面下で交流があり、このマオイストとスクンバシの連帯こそは、現在のネパール王国体制にとり重大な「危機管理」上の対象であることが自明となったのである。佐々淳行の用語を借りれば、危機管理における（国家の）「クライシス・コントロール」という現象に筆者は予期せずして自分のフィールドワーク地において遭遇しているのである。

第三には、平成13年10月26日に大阪市中央区の日本綿業倶楽部で開催された大阪国際大学国際関係研究所主催の第14回シンポジウム「日本社会のリーダーシップと危機管理の特徴」は、大変な盛況であった。このシンポジウムが盛況となった理由の最大のものは、シンポジウム開催の一ヶ月前の9月11日に米国で同時多発テロが起こったことの影響であろう。このシンポジウムの出席者の三分の二以上が、関西一円の企業や地方官公庁の管理職の方々であったことから、日本人の経営者や管理職の方々の間で遅まきながら「危機管理」の重要性を認識しだしたという実感を、筆者は体験した。筆者はこのシンポジウムの司会役という役目上、このシンポジウムの講演者の一人で日本での危機管理の第一人者であると言われる元内閣安全保障室長の佐々淳行氏と個人的に面談し、彼の著書を5冊通読する機会も得た。そして彼がなぜ最近の日本で『浅間山荘』（役所弘司・主演）と題する映画の主人公として取り上げられるほどの人物であるかが解ったし、また彼の書物が体験上の危機管理とリーダーシップの要諦を幅広く蓄積し体系化していることに感服した。

しかしながら筆者は彼の本を読みながら、これは企業研修や専門学校の教科書としては

優れたものであるが、実証的な社会科学の学問としてはやや不足があるという実感を抱いたのも確かなことである。この感想は、筆者が佐々淳行の著書に盛られた内容が学問的ではないと主張していることを意味しない。佐々の論考は自分の体験に基づく思考から演繹した数多くの「経験則」の集大成であり、それはそれで実証的な社会学・政治学の貴重な基礎資料たることは間違いない。ただ惜しむらくは、彼の膨大な経験則は、これまでの社会科学の理論体系の中でどのように位置付けられるべきかという最終段階の知的作業が不問とされて残されている。だから佐々自身にその最後の段階の仕上げをする意志がないとしたら、誰かがそれを行わなければ勿体な過ぎる話ではなからうか。

そもそも筆者が危機管理の問題に関心を抱き始めたのは、米国の大学院に留学中であったから、四半世紀以上も昔のことになる。シカゴの街中で何度か金を巻き上げられたからだけではない。何か起こればすぐに“I am sorry”という日本人の一人として、米国人に大きな付けを払わされた後悔から、謝罪する前に自己の行動をデフェンスする発想の必要性を痛感したことがあった。これこそ日常生活における「危機管理」の必要性でなくて何であろうか。米国の大学では講義中の教室でもファカルティー・ミーティングでも、教師も学生も興奮で真赤に顔を上気させながら一生懸命に議論をする姿をよく見かけたものである。しかし英語力の問題はさておき、日本人たる自分は決してそのように激昂した議論に携わることがなかったし、同じ日本人留学生仲間を見ても、怒り心頭に来るような真正面からの議論をする者は見かけたことがなく、押並べて、そのような緊張場面をどこか避けようとするところがあるように思えたのである。この相異は、議論好きとか議論嫌いかの違いではなく、優劣・正邪の決着をつけようとするか、あるいは決着を曖昧に残したまま感情的衝突を回避したがるかの日米間の文化的相違から生じる相違ではなからうか。このような日本人の「危機回避」の傾向に着目すれば、日本人に「危機管理」を苦手とする性向があることを直感することは難しくない。そこで本稿では、「日本人の危機管理意識の脆弱性」について私見を述べてみたいと思う次第である。

日本人の危機管理意識の脆弱性については、佐々淳行も同様の認識を持っており、彼は三つの理由を挙げている。第一は、「国境を接する陸続きの隣国をもたず、四面海洋で守られた島国として国家安全保障上の好条件に恵まれたという地理的条件」（佐々1997：3）である。第二に、「徳川鎖国体制もとの泰平によって“弛緩”して退化し、明治維新後、外圧を受けて“緊張”が高まって異常成長し、敗戦によって“過度緊張”がほどけて、“昭和元禄時代”にまた“弛緩”し、そしていままた“不確実性の時代”を迎えて、徐々に“緊張”しはじめた・・・という“動＝反動”の繰り返した」（佐々1997：3）歴史的条件である。第三に、日本人には「熱しやすく冷めやすい、そして忘れっぽい淡白な民族性」（佐々1997：4）がある。佐々が挙げる以上三つの理由に対して、筆者は何ら異議がない。しかし、筆者が文化人類学徒であり、また本稿執筆の目的が将来の日本人の危機管理意識を向上させるための要諦を考察することである点から言えば、第一の地理的理由、第二の歴史的理由は本稿での考察の対象とはならない。第三の民族性の理由こそが、筆者が本稿で最も優先して検討すべき課題であると考えている次第である。

(2) 日本人の建前と本音の使い分け：

日本人が「忘れっぽい淡泊な民族性」を持つという命題は、日本人ばかりでなく海外の知日派の間でも今や周知の事実である。日本人はどんな恨みも「水に流して」忘れ去ろうとするのも同様の淡泊な国民性の故であろう。ここで重要となるのが、「淡泊な国民性」と「危機管理意識の脆弱性」との因果関係の論証であり、この因果関係を媒介する民族的・文化的要因の解明であろう。その点に注目すると、「過去の危機体験を忘れず、人生教訓を説く、“語部”のような存在を煙たがり、知りたくもない未来の不安を予見したり、耳にしたくもない警世の予言を疎ましく思う傾向」（佐々1997：4）があると言う佐々氏の指摘は、特別に注視すべき価値があろう。危機管理には現象としての「危機」そのものを感情抑制でもって直視し、その現象的分析と回避・防衛の具体的方策を慎重かつ迅速に推算することが必要となる。しかしながら、我々日本人は危機の本質から目を離さずに、それに冷徹で豪胆な分析を加えようとはせずに、危機と対決せずに退却し回避しようとする傾向が強いのではなかろうか。危機を直視し対決しようとはせずに次元の異なる美的対象への同一化によって癒されようとする思考回路は、橋川文三(1986)の言う日本浪漫派の文人達が戦争熱に駆られる国民から遊離し官憲の圧力の下で追い詰められ、本来の左翼的反戦の立場を棄てて最後に「耽美的愛国心」に陥ってしまう「思想的転向」の思考回路と通じるものがあるとは言えないだろうか。

戦前戦中を通じて官憲の圧力の下で「理論的信仰」から「実感的信仰」へと「転向」する思想的脆弱性を日本人インテリの思想的特徴とする丸山眞男(1969)の指摘がある。丸山の問題意識は、言うまでもなく橋川文三に受け継がれ、彼の『(増補)日本浪漫派批判序説』(1986)となったことは、言うまでもない。転向したのは、何も日本の左翼思想家ばかりだけではない。牧師である桑原重夫(1986)によれば、日本のキリスト教者も敵性国家への宗教的同一性に基づくスパイ的役割を疑われた時、反戦の立場を辞めて愛国者の仲間化してしまったのであった。このような日本人の思想的(宗教的)脆弱性は何故なのか？ 筆者は、日本人の思想的脆弱性にこそ日本人の危機管理の脆弱性を解明する鍵があるように思えてならない。

そこで思い出すのは、日本人の古来の基層信仰であった神道には、死生観が見られなかった事実であろう。『古事記』では、黄泉の国にいるイザナミノミコトを訪ねたイザナギノミコトが死の腐敗で醜くなった亡き妻の姿に驚いて逃げてくる話がある。この話には、死を「穢れ」として忌み嫌い、黄泉の国を真正面から対象化出来ずに逃げ返ってくる古代日本人の死生観の原型が表わされているのではなかろうか。我が国の先達が伝来した仏教を最初に受け入れたのは、理念的な仏教でなくて、仏教美術への憧憬からであったことは、しばしば指摘されている。このような美的対象としての仏教の受容は、『古事記』に見られる古代日本人のナイーブな死生観の上に、西方「浄土」へ憧憬することによって、それまで抱いていた「死への恐怖」への癒しとしたのではなかったか。このような脈略で、仏教が「葬式仏教」とどめて不思議と思わない伝統的な日本人の心情が生まれる。現代日本人の無宗教ぶりを考察した阿満(1996：66-68)によれば、「それは一言でいえば、日本人の間に“自然宗教”が根強く生きているからだというしかない。“葬式仏教”とは、この“自然

宗教」との妥協の産物なのである。「自然宗教」の先祖崇拜や靈魂観をそっくり認めた上で、仏教的色彩を施したのが「葬式仏教」にほかならない。「葬式仏教」とは、「自然宗教」に仏教の衣を着させたものなのだ。・・・ここまで見ると、「無宗教」とは「自然宗教」と不可分の関係にある宗教意識であることが、ますます明らかになったといえよう。現代の日本人の多くが、「無宗教」といってはばからないのは、近代以後の科学的精神のなせるところではなく、極めて伝統的な「自然宗教」に原因がある現象なのである。」ここで阿満の言う「自然宗教」とは、丸山眞男の「信仰」であり、私の言う「(古) 神道」なのである。

近年欧米人にも無宗教の人々が増加していると言われているが、古くから欧米人はキリスト教に深く帰依する伝統があった。それに比べると、日本人は古くから伝統的に無宗教であったように思える。日本人が無宗教といってはばからない伝統と、彼らが特定の思想的信条に自己の実存の全てを賭けようとはしない態度とは、メンタルに親和し重合しあうものであろう。このようなメンタリティは、日本人の「建前」と「本音」の使い分けを重宝ぶる伝統とも関連する。日本人の建前と本音の使い分けは、相手との直接的な論理的対決を避け、その緊張の場を儀礼的な曖昧さで回避し、感情的対立の表面化を避けようとする場合の、常套手段なのである。しかし、その儀礼的協調の反動として、対立の相手がいない場所では相手の欠点や悪口を言いふらすのも多々見受けられよう。このような日本人によく見られる「建前と本音」の使い分けの慣例には、基本的に他者への「言語不信」が存在することを見落としてはなるまい。自分の中の建前と本音との乖離不安は、少なくとも心を救し合う間柄以外の関係では、他者への言語不信となって転化されることになる。調子のいい事を言っているが、本心では自分を批判しているのではなからうか、賛成してくれているようだが、本当は反対なのではなからうとかの「曖昧性」、「決定不能性」が絶えず付き纏う。この曖昧性は、いつの間にか「幽玄」、「侘び」、「寂び」などの美の極致にまで高められたのであろう。

現在の筆者は、日本人の特徴である「思想的脆弱性」を「神道メンタリティ」の故であると答えることにしている。一神教のキリスト・イスラム教徒とは違って、日本人の基層的信仰はアニミズムに発する神道である。そこにはキリスト教に見られるような「神」と人との厳しい対決も厳格な契約の精神もなく、「カミ」は人に甘えられ、儀礼を通してご褒美(「ムスビ」)を奪い取られる存在であった。文化人類学的な考え方では、我が国の「神道」とは、南アジア・東南アジア系統のアニミズムとシベリア地方から流れてきたシャーマニズムとが融合した上に成立した宗教的儀礼体系であり、何ら創始者も聖典もない。丸山眞男は、神道を「信仰」としキリスト教・仏教を「宗教」として概念的に論理階梯の差を認めているし、また彼は日本人の「思想的雑居性」の概念で、キリスト教も仏教も日本に到来した大宗教は全て神道という裸身信仰を包む「着せ替え人形」の衣みたいな機能になってしまいと言う。季節が変わり、時代が変われば、衣は変わっても、同一の裸身のみは不変で残されてしまう。日本人のキリスト教者や左翼思想化の合理的意識の下には「八百万の神々」の不条理な世界が残されているのである。この問題は、井沢元彦(1995)が示唆するように、古代の「言霊(ことだま)」信仰の歴史的起源にまで辿り着く基層文化の問題であると、筆者には思われるのである。

(3) 「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」:

ジョージ・フレザー卿の『金枝編』には未開社会で見られた「言霊」(言葉に宿る靈魂)の信仰が取り上げられている。古代日本人の間でも言霊信仰があり、ある言葉を唱えることによって、その言葉の内容が実現するという考え方があった。霊を宿す言葉を発話する行為が「言挙げ」と言われたのである。例えば、『万葉集』13巻には柿本人麻呂の「言霊」の歌がある。

葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国
しかれども 言挙げぞあがする 言幸きく
真幸く坐せと 恙なく 幸く坐せば 荒磯波
ありても見むと 百重波 千重波しきに
言挙げすわれ 言挙げすわれ

反歌 磯城島の大和の国は、
言霊の助くる国ぞ 真幸くありこそ

- (訳: ①わが国は神の国である。だから人々は決して言挙げしない。
②だが私は、貴方が幸せに暮らせるように、敢えて言挙げしよう。
貴方が幸せに安全に過ごされるなら、またいつの日か私は貴方にお会いすることが出来るだろう。だから私は、磯の波が幾百も幾千も押し寄せるように幾度も幾度も貴方の幸せを言挙げしよう。

反歌: ③日本の国では言霊が人々を助けてくれる。

④だから私は貴方がたの全てが幸せに暮らされるように、言挙げをするのである。)

上記の人麻呂の歌には、①と②が反転関係にある。①人々は「悪いこと」は決して言挙げしないが、②私は、貴方がたの「良いこと」を敢えて言挙げしようと言っているのであり、何ら矛盾するものではない。①が徹底するならば「呪詛」になり、呪詛は平安人の間では盛んに行なわれている。②が徹底すれば「祝詞」になり、そこでは悪い言葉、不吉な意味は徹底して排斥される。また反歌においては、③良い意味を孕んだ言霊は、人々を助けてくれるのであり、だから④私は貴方がたの幸せを言挙げし続けるのである。この③と④との間にも、何ら意味的矛盾はない。言霊信仰の残滓として生まれた日本人の伝統的思考には、「良い事柄」は言挙げしてもよいのであるが、「悪い事柄」は、相手を呪い殺す場合を除外して、言挙げしてはならないのである。

井沢元彦(1995:92-93)によれば、このような日本人の言霊信仰の残滓としての思考形態の典型を、太平洋戦争開戦17年前に発表された英国人軍事評論家Hector C. Bywaterの太平洋戦争の予測論文に対する日本人の反応に探し出している。

「中国における権益問題でアメリカと対立した日本政府は、内政に対する国民の

不満をそらす意図もあって、対米開戦を決意する。開戦当初、日本はアメリカより海軍力においてやや優位にあり、その優位を維持し戦局を有利に展開しようと、海軍はフィリピンに奇襲攻撃をかけマニラを占領し、西太平洋の制海権を握る。しかし、生産力に優るアメリカが海上封鎖による持久戦法をとり、中ソ両国も反日に転じ、戦局は逆転する。そして艦隊主力をもって行われたヤップ島沖海戦でも日本は敗北し、アメリカはグアム島など南洋の島々を次々に占領し、日本側守備隊は全滅する。さらにマニラも奪い返される。この間、ソビエトは樺太に侵攻、これを占領し、中国軍は南満州を支配下におく。ついに内閣は総辞職するなか、アメリカの爆撃機が東京上空に襲来し、爆弾を投下する。ここにいたって日本は、アメリカ側の講和勧告を受託し、戦争は終結する。」
(井沢1995：92-93； 下線追加、山本)

このバイウォーターによる予測記事は、結果論から言えば実に正確なもので、引用文中に下線を施した三点の部分しか予測が間違っていない。予測の間違い点は、以下の三点である。①日本海軍が開戦まもなく急襲したのは、フィリピンではなくて、ハワイ諸島であった。②日米海上決戦がヤップ島沖ではなくて、ミッドウェーで行われた。③日本は講和勧告ではなくて、無条件降伏を受託した。バイウォーターの予測記事は、日本では石丸藤太海軍大佐により「バイウォーターの太平洋戦争とその批判」と題する翻訳論文として、1924年まだ関東大震災による余震で日本中が騒然としていた頃に出版された。言うまでもなく、バイウォーターの「忌まわしい予測」は、近い将来太平洋で日米が戦えば、日本が「敗戦」すると悪い予想を立てている。しかしながら翻訳者である石丸大佐は、敗戦予測に関して、作者のバイウォーター氏はイギリス人であるので、米国に反日的な運動を引き起こさせて日米間を対立関係に貶めることによってイギリスが漁夫の利を得ることを狙った論文であると注釈を付けて発表している。石丸大佐による翻訳論文は一躍ベスト・セラーになり、そして、そのおぞましい悪い予想の故に人々の強い反感を沸き起こした。それを機に、全国各地で来るべき太平洋戦争の予測に関する種々の講演会や、百貨店イベントが起こって、いずれもが「日本の勝利」を詠い上げることになったのであった。その結果、日本に起こったことは統帥権を武器にした軍部の独裁政治であったことは言うまでもない。そうすると、本音では日本の敗戦を予測する人も、それを公表するならば「非愛国者」としてのバッシングが起こるような社会状況では、よほど勇氣ある者でも日本の敗戦を予告する自説は主張出来なかつたはずである。かくして日本は太平洋戦争を回避する方策を失い、開戦へ、開戦へと転がりおちてしまったのであった。

筆者が問題にしたいのは、危機や否定的な現象の本質（徹底したリアリズム）を直視せずして、それに反発して自分達の希望的観測へと偏向した世論反応が出来上がってしまう過程なのである。「このまま戦えばアメリカに負ける」というマイナスの予測が発表されると、コトダマ信仰の残滓作用によってリアリズムを回避した反発が起こり、「いや絶対に勝てる」という世論のほうが強くなり、そのことによって負けないうための対策が真剣に講じられなくなる。その結果、本当に「負けてしまう（最初のマイナス予測が実現する）」

ことになるのである。この過程をより一般化して、井沢（1995:103-111）は、日本人の「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」を挙げている。言霊信仰の残滓の結果、日本人の「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」は以下の5段階からなる。（1）日本人は意識のどこかで言霊信仰の残滓を今でも残している。（2）「言挙げ」による悪い結果、将来悪い出来事が実現しないように、「悪い予測」を話したり聞いたりしたがる。（3）逆に、良い言挙げの結果を期待して、公式の席では「良い予測」を話したが聞きかたがる傾向がある。（4）この傾向ゆえ、日本人の大衆は、否定的・感情的に受け取られる「悪い言明」を捨てて、「良い言明」のみに拘泥する傾向が強い。（5）その結果、日本人は「マイナス予測」をありのままに受け止め、マイナスをプラスに転じるための方策を講じることを怠り、ついには予測された「マイナス」の結果が実現するような事態に陥ってしまう。少々誇張があるかもしれないが、井沢の言うところは基本的に正しい。これと同様の現象は、現在でも日本の企業でも国家でも起こっている。特にバブル経済崩壊以降は、それが顕著であろう。

「日本では、結果がマイナスとなる予測を発表することができないのである。専門的知識を持つスタッフが、科学的論理的にデータを分析した結果、ある予測が出たとする。それが成功・繁栄を示すプラスの予測ならば歓迎される。しかし、失敗・破滅の予測ならば、発表自体がむずかしい。仮に発表しても非論理的な反発を食い、スタッフは何か下心があるのだろうと勘ぐられ、データの客観性すら否定される。最悪の場合、そのマイナスの予測に対する反発のほうが世論の支持を得て、マイナスをプラスに転じる方策が何一つ講じられないまま、結局マイナスの予測が実現してしまうことになる。」

（井沢1995：102）

この井沢による「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」の起こりがちな日本人の認識・思考過程には、筆者が「感覚的実証主義（sensual positivism）」と呼ぶ基層があるのではなからうか。もちろん、感覚的実証主義とは、現代の日本人が日常的に親しんでいる「科学的実証主義（scientific positivism）」と対置した概念である。科学的実証主義は、物事の因果関係を実証的な合理性に基づいて理解する知的態度である。それに対して、感覚的実証主義は、科学的合理主義では説明が付かない現象に対して、その現象と関連する感覚的な確かさに基づいて現象の因果関係を納得しようとする態度である。言うまでもなく、人間の意識と決定は完全に合理的であるとは言えない。人間や組織が情報処理をする際には、マーチとサイモンによれば、「認知的合理性の限界（Cognitive Limits to Rationality）」（March & Simon 1958：137-172）という限界があることを指摘している。これは、単位時間の処理能力以上の情報がコンピューターに入力された時に、コンピューターが機能を停止する、あるいは暴走するのと類似している。人間の頭脳は、現在のところ、コンピューターよりも柔軟であるので、情報過多になったり情報不足で合理的決定が不能となれば、いたずらに機能をしたり暴走したりしないで、合理的決定から感覚的決定のモー

下に切り替えて、ある種の決定を下して急場を凌ごうとする。我々の用語で言えば、人間の頭脳は認知的合理性の限界に陥ると、科学的合理主義を捨てて、感覚的合理主義に切り替えるのである。

日本人の年頃の娘が、八卦見や週刊誌の巻末の「週刊星占い」に見せられるのも、自分がどのような異性と恋愛し結婚するのかという漠然とした不安を、しかも結婚後の自分の幸せが多分に旦那の社会的地位や経済力に依存しているという我が国の社会的通念にも感化されて、甚だ予測しがたい自分の将来の人生の夢を、束の間の「占い師」のロマンで癒すのであろう。若い娘だけではない。日本人の殆どが現在でも正月の松の内に寺院や神社に「初詣」する古来の慣習を繰り返している。これなども不確実性の現代において、年の初めに「神頼みのゲン」を担いで、その年の無病息災をお願いする日本人の伝統的な危機管理術なのであろうか。半分は馬鹿にしながらも、初詣を済まさないで、何かその年に「良くないこと」が起りそうなの不安が残りそうに覚えるのも、大半の日本人の心境であろう。

プロ野球の選手、相撲の力士、それに株や賭け事の勝負師の間に「ゲンをかつぐ」習慣を持つ人が断然多いのは何故なのか。彼らは、「勝利」を得るためには科学的合理主義に基づいたノウハウを普段の地道な努力で体得することの必要性を十分に認め、その通りの努力を払いながらも、その限界を超えたところで「ゲンを担ぐことによって得られるかもしれないツキ」という感覚的な補償を絶えず希求する思考習慣が定着したのであるに違いない。医者に見離された不治の病に苦しむ患者が薬にもすがらない思いで、難病専門の祈祷師のところに通い始めることもある。万が一にも、その祈祷師のお払いで患者の痛みが柔らごうものなら、彼／彼女は完全にその祈祷師の虜になってしまうのも同様の理由からである。さきほどの「バイウォーターの太平洋戦争の予測記事」も、完全に人間の「認知的合理主義の限界」を超えた領分を不可分に持つ。その非実証的合理主義、感覚的合理主義の部分を担当するのが、勝利したいという国民の願望、欲動であり、その不明瞭・不可解な領域に日本人の「マイナス予測に対するコトダマ反作用の法則」が機能したのに違いあるまい。

(4) バブル経済以降のブランド会社の倒産：

今や経済学者の株予想は当たらないことが定説にさえなりつつある。現代のグローバル化した貨幣市場の動向は、現段階の科学的実証主義では説明不能の部分が多く残している。とりわけ、バブル経済が破綻した後の日本経済の低迷と混乱には、その感が強い。だからこそ現在は、企業や国家の経済の再建方法をめぐっても、「マイナス予測に対するコトダマ反作用の法則」が日本中に蔓延する可能性があることに我々は注意しなければなるまい。日本経済新聞社編の『検証バブル：犯意なき過ち』（2000年）という興味深い本がある。この本は、1985年から最近まで日本経済を批判的に検討しながら、日本のバブル経済がなぜ発生し、なぜそれが崩壊し、なぜバブル崩壊の後遺症から立ち直れないでいるのかを考察した名著である。この著書を興味深いと感じたのは、この本の有名企業倒産のケース・スタディが5年前に出版された井沢元彦（1995）が予想した過程と全く同じであることを私が発見したからである。井沢の予想は、以下のとおりである。

「例えば、企業の一員が「このままでは倒産する」という予測を正確なデータに基づいて出した。ところが経営陣は「そんなはずはない」と受け付けようとしなない。あげくに「そんなデータは信用できん」ということになり、予測を出した人が「弾圧され」、誰一人有効な手段を打たないうちに、本当に「倒産してしまった」という事態もありうるであろう。」(井沢1995:103)

結局バブル経済の発生は「土地神話」から始まり、その崩壊と以後の日本経済の長期低迷は、日本の政界・財界の指導者層の徹底したリアリズムの欠如と毅然としたリーダーシップの不足が大きく関与している。その過程で多くの企業が倒産するのは、「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」に拠るところが大きい。勿論、このような企業倒産や倒産寸前の自治体組織の多出、660兆円という我が国のGNP10年以上に相当する巨額な借金を背負ってしまった墜落寸前の日本国家経済も、この「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」と官僚・財界・政界のリーダー達の「仲良しクラブ」的な癒着構造が合作した「産物」であると言えるのではなからうか。

最近出た本で、産経新聞取材班(編)『ブランドはなぜ墜ちたか』(2002年)も結局、同様の現象を扱っている。日本の一流企業としてのブランド会社、雪印、そごう、三菱自動車などがなぜバタバタと企業倒産に向かっているのか?これは、ブランド企業であることに過信して、その経営者達が自社の「危機管理」の手を抜いたからである。バブル経済以降現在に至る日本の政界・金融界・財界・官僚界の責任者が何事もお手盛り方式、集団無責任体制で、自社・自組織の危機管理をしっかりしなかった付けが今ごろ日本経済の沈没直前という様相を招いてしまったのではなからうか。これは、佐々淳行(2001:49)の言葉を借りれば、日本中の種々の官庁・企業組織の現場指揮官が「ハンズ・オン・マネージャー(hands-on manager:手を汚す管理職)」から「ハンズ・オフ・マネージャー(hands-off manager:手を汚さず奇麗ごとですます管理職)」となってしまったからではなからうか。日本経済の立ち直りは、徹底したリアリズムへの固執と、客観的データに基づいた合議制による「マイナス予測によるコトダマ反作用の法則」への防衛策を講じることこそが最も必要な危機管理意識の向上の出発点となるであろう。

(5) 結論と今後の課題:

本稿では、筆者が最近考えている「日本人の危機管理意識の脆弱性」という問題をまとめてみた。まだ書き足りないことは多いが、筆者の問題提起と考え方の大筋は本稿において提示出来たものとする次第である。本稿は、筆者が目下思索中の『危機管理論』の(1)序章をめざすものであり、この序章につづいて、(2)情報収集としてのフィールドワーク論、(3)危機における群集心理・行動論、(4)M.ウェーバーの「カリスマ」論を批判的に検討した危機管理リーダーシップ論、(5)危機管理に必要な組織行動論などが続くはずである。比較文化論的な視点からのデータを揃えながら以上の諸論を考察することは、筆者の今後の研究課題としておきたい。

国民の老齢化と天文学的数字に跳ね上がった借金、そして金融への強い不信と難題山積

の日本経済は、好転するにはまだまだ年月が必要であろう。しかしながら、日本人が危機管理意識を明確に持ち本来の勤勉性を回復するならば、この難題も何時の日か解決できるものと筆者は信じたい。長い泰平と繁栄の日々に貪った過度な自己中心性を抑制し、危機管理意識を向上させた政官財のリーダー達が「ノーブレス・オブリジェ」を発揮し、組織の中の夫々が持ち場で「ハンズ・オン・マネージャー」となって頑張りさえすれば、日本の経済もいつか上向きに転じるはずである。我が国の大学も未曾有の困難に直面していることは言うまでもない。本学も危機管理意識を強化して近い将来に明るい兆しが現われることを祈願して、本稿の筆を置きたい。

<参考文献>

阿満 利麿

1996年 『日本人はなぜ無宗教なのか』、ちくま新書。

井沢 元彦

1993年 『穢れと茶碗：日本人は、なぜ軍隊が嫌いなのか』、祥伝社。

1995年 『言霊：なぜ日本に、本当の自由がないのか』、祥伝社。

桑原 重夫

1986年 『天皇制と宗教批判（天皇制論叢3）』、社会評論社。

佐々 淳行

1997年 『公務員研修双書 危機管理』（人事院公務員研修所監修）、（株）ぎょうせい。

2000年 『人の上に立つ人の仕事の“危機管理”術』、三笠書房。

産経新聞取材班（編）

2002年 『ブランドはなぜ落ちたのか：雪印、そごう、三菱自動車事件の深層』、産経新聞社。

日本経済新聞社（編）

2000年 『検証バブル：犯意なき過ち』、日本経済新聞社。

橋川 文三

1986年 『増補・日本浪漫派批判序説』、未来社（初版1965年）。

March, James G. & Herbert A. Simon

1958 Organization. New York: John Wiley & Sons, Inc.

丸山 眞男

1969年 『日本の思想』、岩波新書（初版1961年）。

山本 勇次

2000年 「ネパールの民主化到来とスクンバシ集落の形成と発展：ボカラ市のスラム地区の自生的リーダーとコムニタス運動」、3-54頁、山本勇次（編）『スラム地区住民の適応に関する比較研究』（平成10年度・11年度科学研究費補助金・研究成果報告書）、大阪国際大学。